

新約聖書注解シリーズ

新約聖書ハンデーター注解

ウィリアム・マクドナルド 著

THE POCKET
NEW TESTAMENT
COMMENTARY

by

William MacDonald

新約聖書注解シリーズ

新約聖書ハンディー注解

ウィリアム・マクドナルド 著

段落ごとの簡潔な解説

伝道出版社

POCKET
NEW TESTAMENT
COMMENTARY
Paragraph by Paragraph

William MacDonald

Everyday Publications
Ontario, Canada

EVANGELICAL PUBLISHERS
Tokyo, Japan

まえがき

この「新約聖書ハンディー注解」は、説明が明確で理解しやすく、読んでいて楽しい注解書です。段落ごとに要約された注解は簡潔なものですが、さまざまな問題や重要な教理はすべて取り上げられています。その意味や内容は伝統的な解釈に基づいており、霊的な示唆に事欠くことはありません。

本書は新約聖書を学び始めたばかりの人にとって最適の注解書です。全体をざっと大まかに、しかも、大切な神の真理を余すところなく把握できるからです。

また、新約聖書を学んでいる最中で、まだ全体の概略を完全には理解できていない人にとっても有益な書物です。そのため必要な知識はすべて提示されているからです。

さらに、新約聖書の教えにかなり通じている人にとっても、復習のための手引きとして用いることができます。新たな観点から各書卷のすばらしさを発見できることでしょう。

段落ごとの内容が簡潔に述べられているため、忙しい人でも比較的楽に読みとおすことができます。通勤時間や待ち時間、ちょっとした空き時間を利用してぜひ目をとおしてください。本書の学びをきっかけに、読者の方々が、新約聖書をさらに深く学んで行かれるよう願っています。

伝道出版社編集部

目 次

まえがき	3
マタイの福音書	7
マルコの福音書	51
ルカの福音書	81
ヨハネの福音書	126
使徒の働き	161
ローマ人への手紙	199
コリント人への手紙第一	220
コリント人への手紙第二	244
ガラテヤ人への手紙	261
エペソ人への手紙	270
ピリピ人への手紙	281
コロサイ人への手紙	289
テサロニケ人への手紙第一	295
テサロニケ人への手紙第二	304
テモテへの手紙第一	309
テモテへの手紙第二	319
テトスへの手紙	325
ピレモンへの手紙	329
ヘブル人への手紙	332
ヤコブの手紙	350

ペテロの手紙第一	357
ペテロの手紙第二	366
ヨハネの手紙第一	371
ヨハネの手紙第二	379
ヨハネの手紙第三	382
ユダの手紙	384
ヨハネの黙示録	388

マタイの福音書

はじめに

マタイの背景

ある日、マタイが税を集めていると、イエスがそのそばをお通りになった。救い主が「わたしについて来なさい」と言われると、マタイはすぐにすべてを捨てて忠実な弟子となった。後に彼はイエスによって12使徒のひとりに選ばれ、さらにその後、選ばれて最初の福音書を書いた。

マタイの目的と構造

マタイがこの福音書を書いた目的は、ナザレのイエスがイスラエルの「王なるメシヤ」——ダビデの王位を正当に要求できる唯一の人物——であることを証明することであった。マタイは、キリストの誕生と幼年時代に2章、ガリラヤでの宣教に16章、ペレヤ（ヨルダン川の東方）での宣教に約2章、十字架に至る最後の週（場所はエルサレム）に約7章、復活された主の顕現に1章を充てている。イエスの言行がすべて完全に記録されているわけではないが、その生涯の出来事と教えが見事に組み合わせられており、イエスが「神に油注がれた者」——救世主、キリスト——であることが明らかにされている。

マタイの概要

1. 「王であるメシヤ」の系図と誕生（1章）
2. 「王であるメシヤ」の幼年期（2章）
3. メシヤの宣教の準備と宣教開始（3, 4章）
4. 御国の憲法（5—7章）

5. 力と恵みあるメシヤの奇跡。それに対する様々な反応
(8章1節—9章35節)
6. 「王であるメシヤ」の使徒たち、イスラエルに遣わされる
(9章36節—10章42節)
7. あらし雲、たれこめる (11章)
8. 「ユダヤ人指導者たちによる拒絶」という決定的段階 (12章)
9. イスラエルが拒絶したことによる御国の暫定的な姿
(13章1—52節)
10. 高まっていく敵意にも変わる事のないメシヤの恵み
(13章53節—18章35節)
11. エルサレムに向けて進もうとされる王 (19, 20章)
12. 「王であるメシヤ」のエルサレム到着 (21—23章)
13. 王なる主、再臨までの歴史の流れを示す (24, 25章)
14. 十字架直前の最終段階 (26章1—46節)
15. 王、十字架につけられる (26章47節—27章66節)
16. 復活とガリラヤでの再会 (28章)

1. 「王であるメシヤ」の系図と誕生 (1章)

イエスの系図 (1:1—17)

ヨセフの「息子」としてのイエスにはダビデの王位を正当に要求できる権利があったが、この系図はそれを明らかにしている。この系図は、ダビデからソロモンへ、さらにユダの歴代の王たちを経てマリヤの夫ヨセフへと続く。このマリヤがイエスを産んだのである。

イエスの誕生 (1:18—25)

マリヤは、ヨセフと婚約中、聖霊の奇跡によって身重になった。それを知らなかったヨセフは婚約を破棄しようとしていた。しかし、御使いが彼に次のことを確信させた。すなわち、マリヤが聖霊によって妊娠したことと、その子にイエスという名前をつけるべきであること

を。その子はやがて御民をその罪から救うことになるからである。その子が生まれるまで（イザヤ書7章14節の預言どおり）ヨセフと（処女であった）マリヤが肉体的に結ばれることはなかった。

2. 王であるメシヤの幼年期（2章）

東方の博士たちの訪問（2：1—12）

イエスが生まれてしばらくすると、東方から異邦人の博士たちが「王なるメシヤ」を拝むためにやって来た。ユダヤ教に改宗していたユダヤの王ヘロデは、ユダヤ人の王となるべき幼子が生まれたことを聞いた。彼は自分の王位が危うくなることを恐れ、ユダヤ教の指導者たちにメシヤが生まれる場所を尋ねた。その場所がベツレヘムだとわかると、幼子を見つけ出すために、「私も行って拝むから」と偽って、博士たちをベツレヘムに送り出した。しかし彼らは、イエスとその母を見つけ出して贈り物をささげた後、別の道から自分たちの国へ帰って行った。

エジプトへの避難（2：13—23）

御使いから警告を受けたヨセフは、イエスとマリヤを連れてエジプトへ逃げた（13—15）。ヘロデは、「幼子」の居場所をつきとめる努力が水の泡になったので怒り狂い、ベツレヘムとその近辺の2歳以下の男の子を皆殺しにするように命じた（16—18）。ヨセフは、ヘロデが死ぬと、それまでいたエジプトを出て、家族とともにナザレに行き、そこに定住した（19—23）。

3. メシヤの宣教の準備と宣教開始（3，4章）

バプテスマのヨハネの宣教（3：1—12）

2章と3章の間には28年から29年ほどの隔りがある。主イエスは30歳のとき、公に宣教を始めようとされた。しかし、主はまずバプテスマのヨハネの紹介を受けた。ヨハネはイスラエルの民に、「悔い改

めて『王』を迎える準備をせよ」と訴えていた。

人々は、ヨルダン川でバプテスマを受けることによって悔い改めを表現することになっていた。多くの者は心からそうしたが、パリサイ人やサドカイ人たちのように「芝居をする」だけの者たちもいた。ヨハネは言った。前者はやがて聖霊のバプテスマを授けられるが、後者は神のさばきという火のバプテスマを授けられると。

イエスのバプテスマ（3：13-17）

イエスがバプテスマを受けるためにヨハネのところに来られると、ヨハネは、「自分の『主』にバプテスマを授ける資格は自分にはない」と主張した。イエスにはもちろん悔い改めるべき罪はなかったが、「バプテスマを受けることによって、悔い改めた『イスラエルの残りの者』とひとつになるのだ」と説明された。また主は、このようなひとつの実例を示すことによって、次のことを教えておられたのである。すなわち、カルバリでの死という「バプテスマ」を受け、その後、復活することによって、ご自分が「すべての正しいこと」をどのように成し遂げられるのかを。

イエスが受けた誘惑（4：1-11）

イエスは道徳的に完全なお方であり、「王」として全く申し分のないお方であったが、サタンがイエスを誘惑したことによってそれが証明された。3つの誘惑は、(1)パンだけで生きること、(2)人目を引くスリル満点の離れわざで神を試みること、(3)悪魔からこの世の国々を手に入れることであった。これらはエバが受けた誘惑に符合している。「その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった」（創世記3：6）。そして、「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」（Iヨハネ2：16）という、ヨハネの「この世の定義」とも符合している。イエスは、申命記からみことばを引用することによって、3つの誘惑すべてに立ち向かわれた。「すると